



中国言語学における周縁からのアプローチ 文化 交渉学の一領域として

著者	内田 慶市
雑誌名	東アジア文化交渉研究 = Journal of East Asian Cultural Interaction Studies
巻	1
ページ	29-43
発行年	2008-03-31
その他のタイトル	Peripheral approach on Chinese Linguistics as a area of Cultural Interaction Studies
URL	http://hdl.handle.net/10112/3168

中国言語学における周縁からのアプローチ

— 文化交渉学の一領域として —

内 田 慶 市

Peripheral approach on Chinese Linguistics
as a area of Cultural Interaction Studies

UCHIDA Keiichi

Depending upon the base upon which one respectively stands, in other words, depending upon one's area or field of specialization, different answers are possible to the question "What is Cultural Negotiation Science?" And yet they all share a fundamental methodology, which is an "approach from the periphery". This paper considers the relation between that "periphery" and the "center" from the standpoint of Chinese linguistics, it attempts to examine the content of the correlation between the "individual" and the "common", or the "special" and the "universal", concepts that are connected to that relationship between the "periphery" and "center", and it searches for the possibilities in and the effectiveness of that method.

キーワード：文化交渉学、周縁からのアプローチ、中心、中国言語学、個別と一般、特殊と普遍、中国文法学、虚実論

はじめに：周縁からのアプローチ

ものごとには「中心」だけを見ていては、その「本質」はつかめないということがよくあることである。台風の目の中であっては風はなく、その「周縁」にこそ風は吹くものである。まさに古人はうまく言ったもので、日本には「灯台下暗し」あるいは「岡目八目」という言葉が、中国にも「当局者迷、傍観者清」「不識廬山真面目、只緣身在此山中」などという俗諺が残されている。

「周縁」と「中心」の関係は、様々な角度から考えられるが、以下の朱徳熙1985で述べられているような「比較対照」もその一つの具体的現れということもできる。

客：中国語文法の特徴は何なのか。この問題について私はずっとはっきりしないのです。今日はあなたのご意見をお聞きしたいと思います。

主：特徴というのは、比較によって明らかにされるものです。比較がなければ特徴もありません。従

って、中国語文法の特徴は何かと問う場合、まずもって一体あなたは中国語をいかなる言語と比較しようとするのかを問わないといけません。(2p)

さて、現在の学問研究はますます細分化されてきており、その結果、重箱の隅を突つつくような微小な一つの現象には対応できても、全体を見渡した議論ができなくなっている。中国語文法の研究などでも、極めて個別的な現象に対する研究は深まり、確かにそれは一つの学問の進歩であるが、一方では、中国語の全体を見渡した体系的な「文法論」の構築ができなくなっている。そもそも、「文」とは何か、「主語」、「述語」とは何かという基本的な事項すらも説明されずに、「了」の2つがどうのとか、進行の「在」とは何か、「的」がいるときいらぬ時とか、補語と連用修飾語の違いはどうのといった、個条的なものの寄せ集めになっている（もちろん、そのような個別の問題の解明は必要なことである）状況である。何よりも、「言語とは何か」という最も本質的な問いかけが抜け落ちてしまっている。言語観なるもの、大げさに言えば、世界観が欠如しているのである。これが本当に学問の進歩・発展と言えるのだろうか¹⁾。

また、最近「学際」とか「脱領域」という方法も一種の「流行」としてもはやされている。これは実はごく当たり前の方法なのだが、しかしながら、この場合にも「初めに学際ありき」ではないことに留意しなければならない。あくまでも確固としたとした「専門」があつての「学際」であり、それがない「学際」や「脱領域」は「根無し草」であることを忘れてはならないだろう。

いずれにせよ、私たちはこの十数年来「周縁からのアプローチ」を提唱し、それによる中国言語学の研究を推し進めてきたが、この方法の言語研究、特に文法研究に対する有効性について改めて以下私見を述べることにする。

1. 周縁資料の有効性

1-1. ヨーロッパ人の中国語研究

中国では学問体系としての「言語学」の成立は近代に入ってからのことである。しかし、そのことは決して古代中国人が「言語とは何か」ということを考えてこなかったということの意味しない。その実、中国人も古代より「言語とは何か」について深い考察を行っていた事実は確かに存在する。たとえば、すでに荀子は「正名篇」において、「言語の目的」、「言語の社会的規範性」「人の認識の発展過程と単語の関係」等々について以下のように述べている²⁾。

＜言語の目的＝対象物を他と区別するもの、心の意味を伝えるもの＞

異形離心交諭，異物名實玄紐，貴賤不明，同異不別，如是則志必有不喻之禍，故知者為之分別制

1) 実は文法学者だけでなく、他の分野でも同様である。音韻学者は音韻だけ、方言学者は方言だけ、また同じ文法学者でも、現代語文法学者は現代語だけ、歴史文法学者は歴史文法だけという具合である。共時的、通時的両面から言語を扱うべきという当たり前の方法が軽視される傾向にある。

2) 詳しくは、内田慶市 1995参照のこと。

名、以指實、上以明貴賤、下以辨同異、貴賤明、同異別、如是則志無不喻之患、事無困廢之禍、此所爲有名也。(様々異なった事物に対して、人々がそれぞれに別々の心で勝手に理解することになれば、それらの事物と名称の対応関係が混乱し、貴賤の区別も、ものの同異もはっきりとしなくなる。そうなる、精神面ではお互いに理解できないという弊害が起こり、事柄においても困憊するという禍が起こってくる。そこで知者は、ものごとを区別し、名称を制定して、それによって対象を指示し、貴賤や同異の区別をはっきりさせるのである。貴賤や同異の区別がはっきりすれば、先に述べた弊害もなくなってくる。これが名称を必要とする理由である。)

名也者、所以期異實也。(名称とはそれによって対象を区別することを目的とするものである。)

彼名辭也者、志義之使也。(いわゆる名辭というものは、心の意味を伝えるための使いである。)

<言語の社会的規範性=対象と言語には直接的関係はない=約定俗成>

名無固宜、約之以命、約定俗成、謂之宜、異於約、則謂之不宜、名無固實、約之以命實、約定俗成、謂之實名。(名称にはもともと定まった意味というものはない、約束によって命名されただけである。約束が定まって習俗にまでなれば、それを意味といい、約束に違えば、意味を外れているということになる。また、名称にはもともと定まった実体=対象というものはない。約束によって命名されただけである。約束が定まり習俗にまでなれば、それを実名というのである。)

<人の認識の発展過程(具体的な方向と抽象的な方向)と単語の関係=「単名」「兼名」「共名」「別名」など>

單足以喻單、單不足以喻則兼。(単名で十分理解できれば単名とし、それで不十分であれば兼名とする。)

單與兼、無所相避、則共。(単名と兼名が同類であれば、共名とする。)

萬物雖眾、有時而欲徧(無)舉、故謂之物、物也者大共名也。推而共之、共則有共、至於無共、然後止。(万物は多くあるが、時にはそれを総称したいときもある。そこでそれを「もの」と名付ける。「もの」は「大共名」である。個々の名称をひっくるめて共名とし、共名になれば、またそれを合わせて更に大きい共名とし、ついにはそれ以上合わせるができなくなったところで止まる。)

有時而欲徧舉之、故謂之鳥獸、鳥獸也者大別名也。推而別之、別則有別、至於無別、然後止。(時には万物を一つ一つ示したいときもある。そのときには、「鳥」とか「獸」とか命名するのであり、それを「大別名」という。一つの名称を押し分けていって別名とし、更にそれを小さな別名とする。ついにはそれ以上分けることができなくなったところで止まるのである。)

荀子の他にも、墨子、公孫龍などが優れた言語観を示している。しかしながら、いわゆる学問体系としての言語学あるいは文法学ということになると、たとえば、体系的な文法研究は清末(1898)の馬建忠による『馬氏文通』の登場を待つよりなく³⁾、それ以前の文法研究はあくまでも「經学」の「附庸」

3) 筆者の最近の研究によれば、『馬氏文通』以前にすでに畢華珍の『衍緒草堂筆記』(1840年前後)があり、そこでは伝統的な虚実論に基づく体系的な文法論が示されており、ヨーロッパの中国語学者、たとえばバザンやエドキンズ

としてあり、「経文」に対する「注釈」（「訓話学）」という形で個別的な語、しかも、「助字」の解釈に主眼が置かれるものであった。

これに対して、ヨーロッパではすでに古代ギリシャ、ローマ時代から言語学という学問分野が確立しており、16世紀には宣教師を中心として中国語に対する言語学的研究が行われていた。彼らは、宣教師でありながら一方では優れた言語学者の資質を有し、中国語の様々な特徴（単音節語であること、声母と韻母の関係、母音が優勢な言語であること、品詞転化、量詞の存在、動詞の具体性、更には「官話」と「方言」の差異、書面語と口頭語の違い等々）について正確な記述を行っている。中国語文法研究を例にしても、18世紀中葉までにすでに以下のような専門書が著されている⁴⁾。

Martino Martini (衛匡國), *Grammatica Sinica*, 1653

Francisco Varo (萬濟國), *Arte de la lenga Mandarina*, 1703

T. S. Bayer, *Museum Sinicum*, 1730

Prémare (馬若瑟), *Notitia Linguae Sinicae*, 1720

Fourmont, *Linguae Sinarrum Mandarinicae hieroglyphicae Grammatica duplex*, 1742

19世紀に入るとさらに以下のようにプロテスタント宣教師を中心にした多くの中国語研究および文法研究書が登場してくる。

(1) Joshua Marshman, *Clavis Sinica (Elements of Chinese Grammar)* [中國言法], 1814

(2) Robert Morrison (馬禮遜), *A Grammar of the Chinese language* [通用漢言之法], 1815

(3) Abel Rémusat, *Elemens de la Grammaire Chinoise* [漢文啓蒙], 1822

(4) J. A. Gonçalves (公神甫), *Arte China* [漢字文法], 1829

(5) Stanislas Julien, *Exercices pratiques d'analyse, de syntaxe et de lexigraphie chinoise*, 1842

(6) Gützlaff (郭實獵), *Notices of Chinese Grammar*, 1842

(7) M. A. Bazin, *Grammaire Mandarine*, 1856

(8) Joseph Edkins (艾約瑟), *A Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect*, 1857

(9) James Summers, *Handbook of the Chinese Language*, 1863

(10) W. Lobscheid (羅存德), *Grammar of the Chinese Language*, 1864

(11) T. P. Crawford (高第丕), *Mandarin Grammar* [文學書官話], 1869

(12) S. Julien, *Syntaxe nouvelle de la langue Chinoise*, 1869

(13) P. Perny, *Grammaire de la langue Chinoise*, 1873

(14) J. S. McIlvaine, *Grammatical Studies in the Colloquial Language of Northern China*, 1880

は彼の文法論を自著の中で紹介している。これらについては内田慶市 2005を参照のこと。

4) 内田慶市 2004 参照

- (15) Imbault-Huart, *Cours éclectique de langue Chinoise parlée*, 1887
- (16) Chauncey Goodrich, *How to learn Chinese language*, 1893
- (17) O. F. Winsner, *Some thoughts on the study of Chinese*, 1893

1-2. ヨーロッパ人の中国語研究資料 (欧文資料) の有効性

さて、これらのヨーロッパ人の中国語研究資料は中国言語学研究に有効かどうか、そしてもし有効であるとすれば、それは何故かということである。

彼らの研究が中国語研究に有効である理由は主に以下の数点を挙げることができる。

- (1) ヨーロッパでは早くから言語学あるいは文法学が確立していたこと。
- (2) 彼らは外国人であるので、自分たちの言語と中国語の比較対照を通して、中国人ではごく当たり前の自明の現象も見逃さず、その特徴を客観的に描写することができたこと。
- (3) 彼らの文字は表音文字であり、漢字の音注にローマ字を使用したことで当時の音韻が (中国の伝統的な反切法に比べて) より科学的に記述できたこと。
- (4) 彼らの大部分は宣教師であり、その布教の範囲は広く、そのことによって「官話」と「郷談」 (= 「方言」) の違いについても意識できたこと。

これらを一言で言えば、まさに「傍観者清」である。

ただ、日本においては、この欧文資料の有効性についてはすでに1950年代から香坂順一、太田辰夫、魚返善雄、尾崎実などによって繰り返し主張されてきたことである。たとえば、太田辰夫は「清代の北京語」(1950) や「北京語の文法特點」(1964)、『『紅樓夢』新探』(1965) といった論考の中で、Mateerの『官話類編』や九江書会版『官話指南』の双行注や三行注などを駆使して北京語と南方語の特徴を明らかにしているし、香坂順一や尾崎実なども、『官話類篇』の書き込みや、Wadeの『語言自邇集』、Wiegerの『漢語漢文入門』等の欧文資料を利用して中国近世語の特徴を明らかにした。魚返善雄も早くから欧米人の中国語研究に注目し⁵⁾、欧米人が特に「官話」学習において必読書として挙げていた『聖諭廣訓』の翻刻なども行っている他、琉球官話等のいわゆる「周縁」資料についても言及している。

一方、中国においてはかつて羅常培がトリゴーなどの初期宣教師の資料を用いて音韻学的な研究をした(1930) 以外には、これまで欧文資料を扱うことは少なかったが、この数年来、北京外国語大学中国海外漢学センターを中心に急速に研究が推し進められている。ヨーロッパでも同様であり、今後は世界的規模でこれらの資料を使った研究が広がっていくと思われる。

1-3. 周縁資料の具体的内容

中国言語学研究における「周縁」資料としては、欧文資料以外にも、以下のようなものが考えられる。

5) たとえば、魚返善雄 1940「アメリカの支那語研究」(『中國文學』第68号) 参照。もちろん、これらの他に、何盛三(1928)『北京官話文法』などでも欧米人の中国語研究を一定程度説明しているし、石田幹之助の一連の業績も忘れてはならないものである。

- (1) 朝鮮資料…『老乞大』『朴通事』『華音啓蒙』等
- (2) 満漢・満蒙資料…いわゆる「合璧」資料で、『清文指要』類
- (3) 琉球官話資料…『百姓官話』等
- (4) 唐話資料…『唐話纂要』など唐通事の「課本」類、あるいは漂着船資料
- (5) 日本人の手になる「課本」資料…『官話指南』など
- (6) ベトナム資料…明・清を中心とし、「字喃」や「漢字語」など

これらの他に、いわゆる「旅行記」（『走向世界叢書』に収められているものを典型とする）や、漢外対照辞典類、漢訳聖書などは、とくに語彙研究には重要なものである。

また、「中国語の周縁」という場合、中国語内部の「中心」と「周縁」ということも当然考えられていい問題であり、その場合、いわゆる「雅言」と「方言」、「官話」と「郷談」、あるいは「普通話」と「方言」、更には「書面語」と「口頭語」や「古典語」と「現代語」といった関係で中国語をとらえる観点も浮かび上がってくるはずである。

2. 「周縁」と「中心」

2-1. 言語研究における「周縁」と「中心」－「個別」と「一般」あるいは「特殊」と「普遍」の関係

「周縁」と「中心」という関係は、また、言語学での「個別」と「一般」あるいは「特殊」と「普遍」という関係とも相通じるものがある。結論から言えば、両者はおのおの相對立するものではなく、相互に補完し合うものであり、「あれかこれか」の関係ではなく「あれもこれも」という関係にあるべきものである。

ところが、多くの言語学者は、個別言語学（たとえば中国語学、国語学、英語学など）を研究する者は、個別言語研究だけに止まり、他方、一般言語学者は、一般言語学が指導理論であり、一般言語学で以て全ての個別言語の諸問題を解決できるという一種のうぬぼれを持っている。

この言語研究における「個別」と「一般」あるいは「特殊」と「普遍」の関係については、つとに時枝誠記 1941 が以下のように指摘している。

言語學が個別的言語を外にした一般的言語（その様なものは実は存在しないのであるが）を研究するものであるとは考へられないのと同時に、國語學はそれ自體言語の本質を明める處の言語の一般理論の學にまで高められねばならないのである。（序 4 p）

言語の本質が何であるかの問題は、國語學にとつて、最初の重要な課題とならなければならない。しかも、國語學の究極の課題は、國語の特殊相を通して、その背後に潜む言語の本質を把握しようとするのであるから、言語の本質の探究は、又國語學の結論ともなるべきものである。（同上 4-5 p）

國語學即ち日本語の科學的研究の使命とするところは、國語に於いて發見せられる總ての言語的事実を摘出し、記述し、進んで國語の特性を明らかにすることにあるが、同時に、國語の諸現象より言語一般に通ずる普遍的理論を抽象して以て言語学の體系樹立に參畫し、言語の本質觀の確立に

寄與しなければならない。(言語研究の態度 3p)

すなわち、個別言語の研究は、その個別言語の特殊性を通して、その背後にある言語一般の本質を明らかにすべきものという立場である。誠に真つ当な考え方であるが、時枝の時代にあっても、次のように両者は対立したものとして存在し、しかも一般言語学が個別言語学の指導原理、予定された理論体系であったのである。

處が一方今日の言語學は、國語學に對して一般基礎理論を供給するものとして國語學に對立してゐるものと考へられてゐる。言語學は國語學にとつては豫定せられた理論體系であり、指導原理である。これが一般に認められてゐる國語學に對する言語學の關係である。(同上 3-4 p)

また、このような關係が構築された原因として、以下のように述べている。

言語學が我が國に輸入せられた時、それは國語學と極めて特殊な關係に於いて結ばれたのである。この關係は、明治維新以降泰西の學術が我が國に輸入された時、諸々の學問界に共通に現れた現象として考へられるのであるが、常に對象への考察以前に、豫め學の方法理論といふものが與へられ、對象はこの方法理論に従つて考察されてきた。國語學は、その独自の研究によつて言語學に寄與することを目標とせず、言語學をその據つて以て立つべき指導原理と考へたのである。(同上 5 p)

明治の國語學界に、この変則的な情勢を馴致するに至つたについては、次の二の理由が擧げられると思ふのである。第一の理由は、明治以前の我が國語學界の水準が、西洋のそれに比して極めて低かつたと考へられる。間に合わせでも、他人のものを借りて來て目前の事態を整備せねばならぬ情勢にあつたのである。(中略)次に第二の理由は、明治以前の國語研究が、未だ理論的體系にまで組織されてゐなかつたことである。(中略)明治の國語學が、泰西言語学の理論を足場に求めたことも亦止むを得ぬことであつたのである。(同上 6-7 p)

このことは、まさに日本の近代化の歩みの中での必然的な現象でもある。福沢諭吉は近代化を推し進めるために「脱亜論」を提唱したが、そうした状況にあつて、夏目漱石は『三四郎』の中で、そのような近代化に対して「亡びるね」と三四郎と列車に同席した「かの男」に言わしめたのである⁶⁾が、時枝の思いは「かの男」そのものであるということが出来る。

いずれにせよ、時枝は、「特殊」と「普遍」の關係について、次のように結論付けているのである。

一般に言語學の理論及び方法は普遍的であり、國語學のそれは特殊的であるといふ風に考へられてゐるが、それは極めて皮相的にのみいひ得ることであつて、必ずしも正しい判断ではない。(中

6) 姜尚中 2007 参照

略) 普遍と特殊とは、兩々相對立した形に於いて存在してゐるのではなく、一切の特殊的現象は、その中に同時に普遍相を持つといふことは、國語に於いてばかりでなく、一切の事物について云ひ得ることである。國語についての特殊的現象の探求は、同時に言語における普遍相の闡明ともなり得るのである。(同上 8-9 p)

言語を研究する者は、個別言語を研究する者であろうと、あるいは一般言語学を研究する者であろうと、この時枝の「特殊」と「普遍」の關係をもう一度思い返すべきであろう。とりわけ、日本の多くの英語学者はこの言葉をよくよくかみしめるべきである。時流に乗って、構造主義言語学が主流の時はそれに倚りかかり、それが駄目なら変形文法に、それでも躓けば格文法に、そして昨今の認知言語学の大流行という具合である。模倣にのみ頼り、以下のアラン・ポーの言を俟つまでもなく、その根本的理論、原則まで問うことをしないのである。

もしこの点について、議論しようというならばね、それは、あくまで原則そのものに対してでなくちゃならん。そして、そのためにはね、原則の理論的根拠そのものを、検討してみなくてはならぬ。(アラン・ポー「マリ・ロジェエの迷宮事件」)

中国においても情況はほぼ同じである。

アヘン戦争以後の欧米列強の中国への進出と、「遅れた」中国という状況下にあつては、馬建忠は中国語の体系的な文法を記述するためにラテン語文法を模倣するしかないのである。しかしながら、それ以降も多くの中国語学者（もちろん、陳望道や張世禄といったいわゆる「海派」には中国語独自の文法論を唱える者もいたが）は西洋の文法の枠組みの中で中国語文法を記述してきたのであり、その反省が見られるのは近年のこと（たとえば、朱德熙や申小龍など）である。

ただ、時枝のような方法は、一方で偏狭な「民族主義」に陥る危険もはらんでいる。それは、多くの歴史的仮名遣い論者が民族主義的な立場を取る傾向にあるのと似ている。私は歴史的仮名遣い論者であっても、そのような立場は取らない。あくまでも科学的か、理にかなっているかどうかによるものである。そして、そのことは、時枝自身も次のように述べていることである。

従つて言語學と國語學との關係は、前者が後者が據つて以て立つべき指導原理ではなくして、特殊言語の一の研究の結論として、國語學の批評的對象となり、又他山の石ともなるのである。(中略) この様に考へることは、徒に唯我獨尊にして他を排する底の偏狭な態度を執ることを意味することではなくして、眞に國語學の行くべき道を考へることであり、同時に泰西言語學の立脚点である科學的精神を生かさうとするが爲である。(同上 9-10p)

以上述べてきた、「個別」と「一般」、「特殊」と「普遍」の關係は、それを「周縁」と「中心」と置き換えても同じことである。兩者の關係はそのようであるべきだというのが筆者の基本的な立場である。

2-2. 「個別」が「一般」であり、「特殊性」が「普遍性」でもある－「虚実論」を例として

印欧語では一般的に文には必ず「主語」が存在し、また、「主語」は通常は動作主（仕手）である場合が多い。このことから彼らはア・プリオリ的に「文とは主語と述語から成る」と説明する。言語学の革命ともてはやされ一世を風靡したチョムスキーですら、極めて当たり前のようにS=NP + VPを前提として文の分析を始めている。

しかしながら、日本語や中国語では必ずしもそうではない。日本語では「主語廃止論」といった論も主張されているし、中国語でも以下のような文は印欧語の「主語－述語」という関係では説明ができないものである。

前边来了一个人。(前から一人の人がやってきた)

台上坐着主席团。(舞台に主席団が座っている)

玻璃坏了。(ガラスが割れた)

房子烧了。(家が焼けた)

这里的水可以喝。(この水は飲めます)

这些给你。(これらをあなたにあげます)

下雨了。(雨が降ってきた)

「存現文」とか「自然的被動」、「主題化文」とか言われるものであるが、印欧語の「主語」、「述語」の概念の範疇では収まりきらないものである。

とすれば、この「文＝主語＋述語」という規則は個別言語のものであって、言語の本質、言語の一般性とは言いがたいものとなるはずである。このことについて、時枝は次のように述べている。

國語に存在しないものは、言語の一般性とはいひ得ないのである。國語に存しない様な一般性が、假にあるとしたならば、それはやはりいづれかの言語の特殊性に過ぎないものである。(同上 9p)

「主語」と「述語」のみならず、「動詞と目的語」の関係においても印欧語と中国語あるいは日本語とは異なっている。印欧語のそれは「矢」と「的」の関係にあるのに対して、中国語は極めて複雑な関係を持っているのである。

このような「文＝主語＋述語」とする印欧語の文の見方に対して、中国では伝統的に語を虚実に二大別するという虚実論⁷⁾が存在し、その虚実論では、文とは以下のように説明される。

7) 本来は南宋の詞論に始まるものであるが、虚字とは「話し手の気持ちを表すもの（たとえば、「凡其句中所用虚字，皆以托精神而傳語氣」『虚字説』）、実字とは「実体（対象）を表すもの」である。古くは「虚字」を「辞」（「以名舉實，以辭抒意」『墨子』）あるいは「詞」（「詞、意内而言外也」『説文解字』）とも称した。詳しくは内田慶市 1981を参照。なお、『文心雕龍』などでも「貌」と「情」といった言葉で示されている。

構文之道，不過實字虛字兩端，實字其體骨，而虛字其性情也。（『助字辨略』序言）

構文之道，不外虛實兩字，實字其體骨，虛字其神情也。（『馬氏文通』例言）

つまり中国人は文を「虚字」と「実字」から成るものとみるわけであるが、このような見方は日本の伊藤東涯や皆川淇園、荻生徂徠といった江戸時代の漢学者や鈴木胤、富士谷成章などの国学者の間にも見られるものである。とりわけ、鈴木胤は以下のように『言語四種論』において、語を「詞（物事を指し表して詞となる）」と「てにをは（其の詞につける心の声なり）」と二大別し、「詞」をさらに「体の詞」「形状の詞」「作用の詞」に分類した。

言語ニ四種ノ別アル事

詞ニ四種（クサ）ノ別トハ、一ツハ万ツノ名目ニテ、体ノ詞。又動カス詞ト云。一ツハテニヲハ。一ツハ形状（アリカタ）ノ詞。一ツハ作用（シワザ）ノ詞。此ニツヲ合セテ、世ニハ用ノ詞ト云。又働ク詞トモ、活用ノ詞トモ、活語トモ云。（二葉表）

前ノ三種（クサ）ノ詞ト、此テニヲハトヲ對（ムカ）ヘミルニ、三種ノ詞ハサス所アリ。テニヲハハサス所ナシ。三種ハ詞ニシテ、テニヲハハ聲ナリ。三種ハ物事ヲサシアラハシテ詞トナリ、テニヲハハ其詞ニツケル心ノ聲也。詞ハ玉ノ如ク、テニヲハハ緒ノゴトシ。詞ハ器物ノ如ク、テニヲハハ其ヲ使ヒ動カス手ノ如シ。（八葉表）

この鈴木胤の語の分類法は中国の虚実論を基盤としたものであり、これが最終的には時枝誠記の「詞辞論」に受け継がれていく。時枝においては、語は「詞（客体的表現）」と「辞（主体的表現）」に二大別され、文とは「詞が辞を包み込むもの」とした。従って、「主語」も「述語」も相対立する概念ではなく、実はいずれも「客体的表現」に過ぎず、それを包み込むものが「辞」つまり「主体的表現」であったのである⁸⁾。この考えは「言語とは音楽や絵画などと同じく表現の一つで、対象－認識－表現という過程的構造をもつもの」であり、「言語とは人の主体的活動そのもの」とする言語観に基づくものであり、構造主義言語学などの、「構成主義言語観」やスターリンに代表される「言語道具説」などとは一線を画すものである。

ところで、ヨーロッパ人の中国語研究を見ていると、以下のように中国伝統の虚実論をその中に巧みに取り入れている事実が明らかになる。

(1) Prémare, *Notitia Linguae Sinicae* (translated into by Bridgman), Canton, 1847

8) 時枝は主語と述語の関係について次のように述べている。

「文に於いて表出されてゐる主語は、述語に対立したものとして表出されてゐるのではなく、述語の中に隠されて居つたもの、包まれて居つたものが外に表出される様になつたものを解すべきである。」（同上書371p）

中国語においても、藤堂明保氏はかつて『中国文法の研究』（江南書院, 1956）の中で、「中国語では、主語は述語に付随した成分と考えられるわけである。してみると、廣い意味で主語は述語を修飾しているものと言ってもよい」（139p）と述べたことがある。

The Chinese language, whether spoken or written, is composed of certain parts. These are called Parts of Speech. Each sentence or phrase, to be entire, requires a verb, without which it could have no meaning; and a noun, to designate who is the actor and what is done. It has prepositions, adverb, and also many other particles, which are used rather for perspicuity and embellishment, than because they are absolutely necessary to the sense. The Chinese grammarians divide the characters which constitute the language into two classes, called hu tsz 虛字 (虚字=筆者), and shih tsz 實字 (實字=同上), i.e. (literally) vacant or empty and solid characters.

The solid characters are those which are essential to language, and are subdivided into hwoh tsz 活字 (活字=同上), and sz tsz 死字, living and dead characters, i.e. verbs and nouns. (27p)

- (2) Morrison, *Grammar of the Chinese Language* (通用漢言之法), Serampore, 1815

The verb is by the Chinese called sang tsee 生字, 'a living word', in contradiction from the Noun, which they call see tsee 死字, 'a dead word'. (113p)

The verb is also denominated tung tsee 動字, 'a moving word', and the Noun tsing tsee 靜字, 'a quiescent word'. (113p)

- (3) Morrison, *Chinese Miscellany*, London, 1825

The Chinese usually divide their words into three classes only, viz. "dead words," by which they mean the names and qualities of things; secondly, "living words," by which they mean those which denote action or suffering; and, lastly, words which they denominate "auxiliaries of speech." (28p)

- (4) Edkins, *A Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect*, 1857

If a common sentence be examined it is usually found to contain word of two kinds, viz. some that have a sense of their own independent of their use in any particular sentence, and others that are employed only for grammatical purposes, to express relations between words, to connect sentences and clauses, and to complete the sentence, so that it may be clear in meaning and elegant in form. 天晚了都是睡覺去了。In this sentence tu and liau mean nothing when viewed apart from the context. They are employed as subordinate words or particles, under the control of certain grammatical laws. We thus obtain the first and most obvious subdivision of words, and it is that commonly used by the Chinese. They call significant words, 實字 shih tsi, full characters, while the auxiliary words or those which are non-significant, they term 虛字 hu tsi, empty characters, particles.

Words may also be viewed as expressive of actions (verbs) and things (nouns). These two

kinds of words are called 活字 hwoh tsi, living characters, and 死字 si tsi, dead characters. (99p)

彼らは、「実字」を「solid characters」(Prémare)「full characters」(Edkins)、「虚字」を「vacant or empty characters」(Prémare)「empty characters」(Edkins)とし、さらには「実字」を「活字」=「living characters」(Prémare)「living words」(Morrison)と「死字」=「dead characters」(Prémare)「dead words」(Morrison)に分けているが、これを見ると、彼らが如何に「中国人のものの見方・考え方」を自分たちの言語研究にも取り入れようとしたかが分かる。Edkinsの「虚字」に対する「In this sentence tu and liau mean nothing when viewed apart from context」(=「不爲義」)という説明などは、古代中国人の「虚字」の考え方を正当に受け継いだものである⁹⁾。それは彼らが中国語と真正面から取り組んだ証であると同時に、イエズス会のキリスト教伝道における「適応主義」の継承であり、モリソンを始めとする「相手方の文化を尊重する」「相手方への文化に身を置く」という「翻訳観」の現れでもある¹⁰⁾。

しかしながら、彼らがこのような中国人の伝統的言語観とも言うべき虚実論を採用したのには、もう一つ、「受け入れるべくそれなりの素地」というものがあつたと考えるべきである。それはヨーロッパにおける「ポール・ロワイヤル文法」の存在である。

「ポール・ロワイヤル文法 — 一般理性文法」は17-8世紀のヨーロッパにおけるラテン語規範文法として高く評価され、18-9世紀の英語文法にも大きな影響を及ぼしたが、その最も肝心な部分は以下の数段である（なお日本語訳は南館英孝訳 1972による）。

文法とは話す技法である。話すとは、人間が自分の考えを表すために発明した記号によって、それを表明することである。(5p)

哲学者は誰でも、我々の精神に三つの作用があることを説く。すなわち、認識し、判断し、そして推論することである。(34p)

第三の作用は、第二の作用の延長であるにすぎぬことがわかる。(35p)

口をきくのは、認識した事物について下す諸々の判断を表現するためである。(35p)

事物に関して我々が下す判断は命題と呼ばれる。例えば、「地球は丸い」と言う場合である。このようにあらゆる命題は必然的に二つの辞項を包蔵する。一方は主部と呼ばれ、人が断言する対象であり、他方は述部と呼ばれ、断言する内容である。これらの二辞項を結ぶ連繋部がある。

さて、この二つの辞項は厳密には精神の第一の作用に属することが容易に理解される。これは我々が認識したことがらであり、我々の思考の対象であるからである。また、二辞項の連繋は第二

9) 唐の孔穎達は『毛詩正義』で「辞」(つまり「虚字」)とは何かについて次のように述べている。

「漢有游女，不可求思，正義曰，以泳思，方思之等，皆不取思爲義，故辭也」(「周南・漢廣」)

すなわち、『詩経』の「有游女，不可求思」における「思」という語について、孔穎達は「泳思」「方思」における「思」を含めてみな「不爲義」であるために「辞」とするということである。実は、上述の鈴木胤の「テニヲハ」についての「サス所ナシ」という考え方もこれに近いものであるといえることができる。

10) 宣教師の翻訳観、自覚的自己同化、「文化の翻訳」については内田慶市 2001を参照。

の作用に属することも容易に理解される。それは我々の精神に固有の作用であり、我々の思考の仕方であると言える。(35-36p)

以上から、人間は自らの精神内で生起することを表わすために記号を必要としているが、また他方、語はごく一般的に次のように区別される必要がある、という結論になる。すなわち、その区別とは、一方は思考の対象を表わし、他方は我々の思考の形態と様式を表わすことである。(36p)

このように、「ポール・ロワイヤル文法」では、人の精神作用は大きく二つ（実際は三つであるが、第三の作用は第二の作用の延長上のもので、大きくは第二と第三の作用は一つにまとめられる）に分けられるという認識論に基づいて、語を「思考の対象」を表す語と「思考の形態と様式」を表す語の二つに大別した。そして、いわゆる文における「主部」「述部」というのは、共に第一の作用に属するものであり、いずれも「認識の対象」であって、それを連繋するもの、つまり「繫辞」こそが文全体を統括する「思考の形態と様式」であるとしたのである。「思考の対象」とは「客体的表現」であり、「思考の形態と様式」とは「主体的表現」（話し手の気持ちを表すことば）に他ならない。こうしてみると、この言語観は中国の「虚実論」や時枝誠記の「詞辞論」そのものであるとすることができる。まさに、これこそが「言語の普遍性」と言うべきものであり、「個別」が「一般」であり、「特殊性」が同時に「普遍性」であるという一つの典型的な例である。

チョムスキーは「ポール・ロワイヤル文法」を再評価した¹¹⁾が、その評価は「ポール・ロワイヤル文法」がチョムスキーの主張する「深層構造」説の先駆をなしたという点である。

言語学の革命と称されるチョムスキーの変形文法が生まれた最大の理由の一つは、それまでの「意味」「内容」を排除して言語の形式を重視するという構造主義言語学が「形式的には全く同じ文が二つ以上の異なる意味を持つ」という、いわゆる「言語の「多義性 (Ambiguous)」の問題を解決できない」という点であった。

たとえば、「a light house keeper」である。

これは、「灯台守」という場合と、「体重の軽い家政婦」という場合がある。このような文の多義性について、チョムスキーは「表層構造は同じであるが、深層構造が異なる」とし、「灯台守」の場合は「深層構造」が「light house」と「keeper」に分かれ、「体重が軽い家政婦」の場合は「深層構造」が「light」と「house keeper」に分かれており、そのような「深層構造」の違いを読み取ることによって「多義性」が解決されるとしたのである。

しかしながら「深層構造」は一体どこにあるのか。私たちが言語と呼ぶものは、表現された「表層構造」以外にはあり得ない。しかも、言語表現は「認識-対象-表現」という過程的構造を持つものであり、認識を対象から切り離して考えることもできないものである。「多義性」と言っても、実際の言語の場、あるいは話し手においては常に一つの意味しか存在しないのである。聞き手はあくまでも「表層構造」を手がかりに、対象を考え、話し手の認識に辿るという「追体験」をするのであるが、その過程

11) ポール・ロワイヤル文法の本質やチョムスキーの再評価、また、チョムスキー変形文法の根本的批判については、宮下真二 1980を参照のこと。

で、話し手の意図した対象と異なる認識をする場合もある。それが「誤解」というものである。

チョムスキーが言うところの「深層構造」とは実は言語の背後にある最も抽象的な「認識」のことであるが、問題はその「認識」を「対象」から切り離し、さらにそれを先験的な存在として、そこから具体的な文（表層構造）を展開させていったことにある。こうした見方は、辞書に収められた「語彙」を「言語」そのものとしたり、言語を媒介する言語規範（文法）を「言語」とする見方にもつながってくる。辞書に収められた「語彙」は時枝が言うように「具体的な語の抽象によって成立したものであつて、宛も博物学の書に載せられた桜の花の挿絵の様なものであつて、具体的個物の見本に過ぎないものであり、それ自身具体的な言語ではない」（同上書13p）のである。つまり、「犬」という同じ「語彙」を使用しても、「言語」表現としては、私が言う「犬」と、彼が言う「犬」とは違うということである。

いずれにせよ、言語の「多義性」についての正しい理解は以下のようなものであるべきである。

一つの言葉が多義性を持つということは、一つの言葉の各種の用法の中から総括されてきたものであり、具体的な言語環境、一つの文の中においては、一つの言葉はやはり一つの意味なのである。（張魚甫 1980）

3. 「文化交渉学」の根本に横たわるもの — 「文化の翻訳」 — 結びに代えて

「文化交渉」あるいは「異文化接触」においては、もちろん「もの」による交渉も行われるが、多くの場合は、「言語」を媒介として行われる。そして、そこで常に問題となるのが「翻訳」ということである。

では、「翻訳」とは何か。

現象から見れば、確かにAという言語のaという語彙を、Bという言語のbという語彙に「置き換える」ことと考えることができる。

しかしながら、「言語は音楽や絵画と同じく人の表現の一つ」であり、「対象－認識－表現」という過程的構造を持つものという言語観に立ったとき、何よりも言語表現の基盤として「人」の存在が不可欠のものとなってくる。

また、言語は元々対象とは直接的な関係を持たないし、言語の「交通」において「感性的な側面」は無視されるものである。言語の「交通」は「超感性的側面」で行われているのである。「超感性的側面」とは、その民族の「共通認識」あるいは「規範」「認識の集合」と言い換えてもいいたろう。そして、その「共通認識」とはその民族の歴史、思惟方法等＝「文化」を反映したものであり、言語の背景にはこの「文化」が存在しているのである。

このように見てきたとき、「翻訳」とは単なる「語彙の置き換え」にとどまらないものとなってくる。

更には、Aという言語のaという語彙を、Bという言語のbという語彙に置き換えた場合、その「等価 (equality)」とは何かという問題もある。たとえば、「犬」＝「dog」において、音声や字形という形式が「等しい」ということではないことは明らかであるが、では、「等しいもの」は一体何なのか。「等しいもの」を追い求めて翻訳家たちは「産みの苦しみ」を味わうのであるが、それは、「言語の翻訳」

が「文化の翻訳」に他ならないからである。宣教師たちにとって最も重要な書物である「聖書」の翻訳において、彼らが何故あそこまで「訳語」にこだわったのかも、その点にあったはずである。「異文化」を伝え合うには、そのような葛藤が行われるのである。

文化交渉学においては、この「文化の翻訳」を常に念頭に置くことも求められるはずである。

本稿では文化交渉学の一領域としての中国言語学のあり方と「周縁アプローチ」、さらには、「個別」と「一般」、「特殊」と「普遍」の関係、「文化の翻訳」の問題等について述べてきたが、我々が目指す「文化交渉学」において扱うべき課題は山積している。私の領域から言えば、概念形成（たとえば「国家」）の問題、教育・出版、印刷の問題、それらの文化交渉学における位置づけ等々が考えられるが、これらについてはいずれ稿を改めて論ずることとして、最後に以下の文章を掲げて若き学究へのメッセージと共に自らの戒めとしたい。

学問において如何なる本質論を採用するかといふことは、一つの賭である。ここに学者のアタマの真価が如実に現れるからであり、「人間は己が論理能力の範囲内でしか対象を理解出来ない」といふ一大真理が貫き通るからである。この賭は学者にとって恐ろしいことである。ここで怯む者は、十分検討もしないで当世流行の学説に身を寄せ、安心立命を得ようとするものだが、かかる主体性のない態度は学問の本道を行くものではない。(鈴木覺「形式と機能の彼岸を衝く体系的英文法論」『翻訳の世界』1982.6)

<参考文献>

- 鈴木胤 1824 (文政七年刊本)『言語四種論』勉誠社文庫68 (1979)
時枝誠記 1941『國語學原論』岩波書店
藤堂明保 1956『中国文法の研究』江南書院
C. ランスロー = A. アルノー著、南館英孝訳 1972『ポール・ロワイヤル文法』大修館書店
張魚甫 1980「歧義是怎样産生的」『語言的奥妙』少年儿童出版社
宮下真二 1980『英語はどう研究されてきたか』季節社
朱德熙 1985『語法答問』商務印書館
内田慶市 1981「中国人は語をどのように分類してきたか —『馬氏文通』以前」『現代言語学批判』(三浦つとむ編) 勁草書房 (のちに内田慶市 2001に収録)
—— 1995「荀子の言語論」『敦賀論叢』第10号
—— 2001『近代における東西言語文化接触の研究』関西大学出版部
姜尚中 2007「夏目漱石 悩む力」『知るを楽しむ — 私のこだわり人物伝』日本放送出版協会